浅間山の火山活動解説資料（令和８年 10 月）

気 象 庁 地 震 火 山 部
火山監視・警報センター

山体浅部を震源とする火山性地震は、９月下旬からやや増加しています。その他の観測データでは、火山活動の高まりを示す変化はみられていません。
山頂火口から 500ｍの範囲に影響を及ぼす程度のごく小規模な噴火の可能性がありますので、地元自治体等の指示に従って危険な地域には立ち入らないでください。突発的な火山灰噴出や火山ガス等に注意してください。
噴火予報（噴火警戒レベル１、活火山であることに留意）の予報事項に変更はありません。

○ 活動概況

・噴煙など表面現象の状況（図１～２、図３－①、図４－①）

山頂火口からの噴煙は白色で、噴煙の高さは火口縁上500ｍ以下で経過しました。

今期間、火映は観測されませんでした。

９日に実施した現地調査では、噴気孔の位置や地形等に変化は見られず、火口底や火口周辺に新たな噴出物の形跡は認められませんでした。

赤外熱映像装置による観測では、７月24日の現地調査と比較して、火口内の地表面温度の分布に変化はみられず、高温域が拡大した様子は認められませんでした

・火山ガスの状況（図３－②、図４－②）

期間内に実施した現地調査では、火山ガス（二酸化硫黄）の放出量は１日あたり 60～100 トンでした。2025 年 12 月頃からは少ない状態になっています。

・地震や微動の発生状況（図３－③～⑥、図４－③～⑦、図５～６）

今期間、火山性地震の日回数は、概ね 30 回から 60 回程度で推移しました。山体浅部を震源とする火山性地震は、９月下旬からやや増加しており、前１ヶ月平均の日地震回数は、概ね 40 回程度となっています。

今期間、震源が決まった火山性地震は、主に従来からみられている山頂直下の深さ－２～－１km（海抜１～２km）付近に分布しています。

振幅が小さく継続時間の短い火山性微動が時々発生しました。

・地殻変動の状況（図３－⑦、図４－⑧⑨、図７～８）

山体の西側での膨張を示すと考えられる傾斜変動は、2024 年５月以降、停滞しています。

GNSS 連続観測および光波測距観測では、今期間、火山活動によるとみられる特段の変化は認められませんでした。

この火山活動解説資料は気象庁ホームページでも閲覧することができます。
https://www.data.jma.go.jp/vois/data/report/monthly_v-act_doc/monthly_vact.php
次回の火山活動解説資料（令和８年 11 月分）は令和８年 12 月８日に発表する予定です。
本資料で用いる用語の解説については、「気象庁が噴火警報等で用いる用語集」を御覧ください。
https://www.jma.go.jp/jma/kishou/know/kazan/kazanyougo/mokuji.html
この資料は気象庁のほか、関東地方整備局、国土地理院、東京大学、国立研究開発法人防災科学技術研究所、国立研究開発法人産業技術総合研究所及び長野県のデータも利用して作成しています。
資料の地図の作成に当たっては、国土地理院発行の『基盤地図情報』『数値地図 50ｍメッシュ（標高）』『数値地図 25000（行政界・海岸線）』を使用しています。



図１－１　浅間山　山頂部の噴煙の状況
追分監視カメラ（10 月８日）



図１－２　浅間山　山頂部の噴煙の状況
鬼押監視カメラ（10 月 15 日）

・山頂火口からの噴煙は白色で、噴煙の高さは火口縁上500ｍ以下で経過しました。

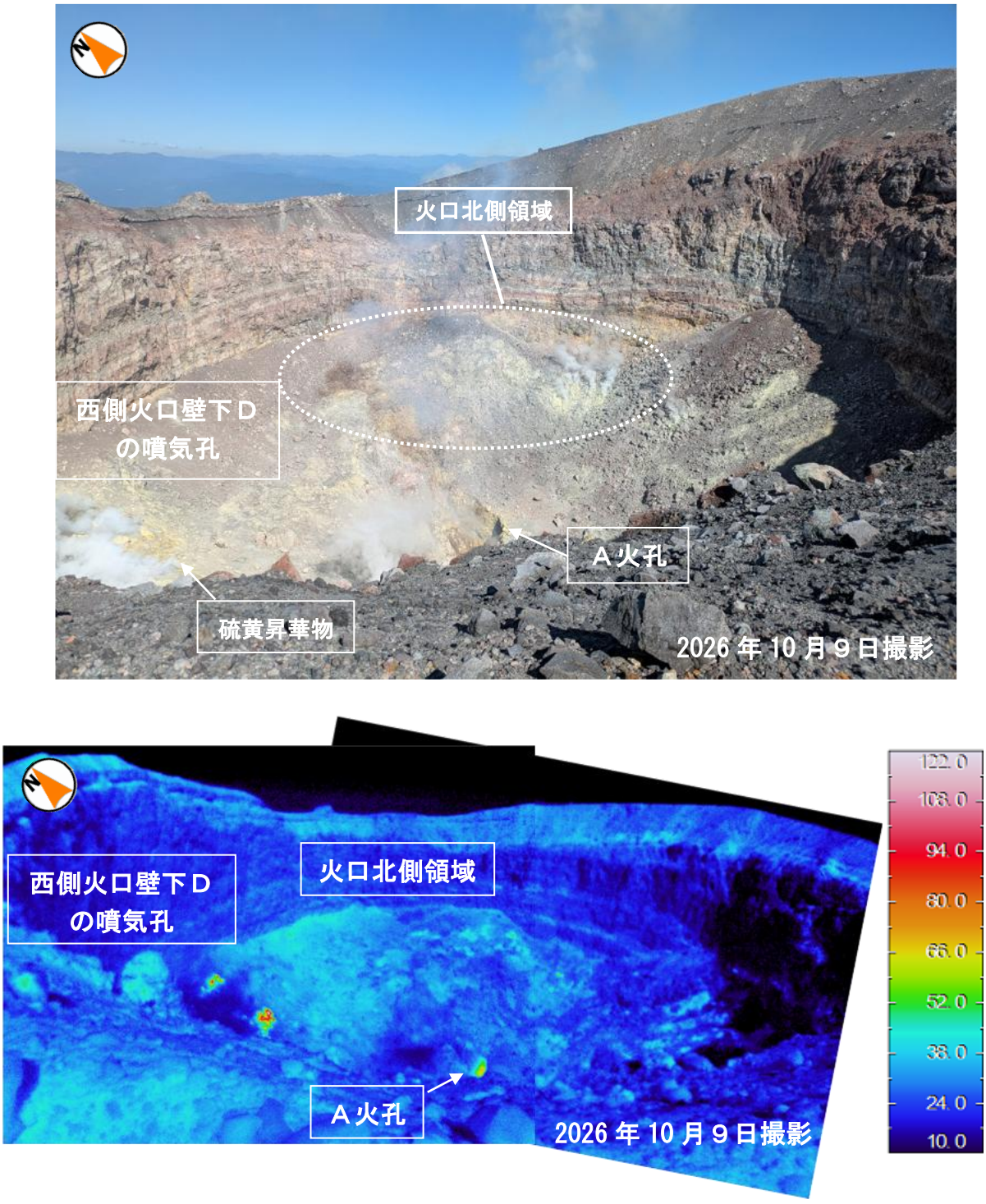


図２－１　浅間山　火口南西縁からみた山頂火口内の状況（2026 年 10 月９日）

・山頂火口底中央部にあるＡ火孔及び西側火口壁下Ｄの噴気孔から白色の噴煙が上がっていました。
・西側火口壁下Ｄでは、鮮やかな黄色の硫黄昇華物の付着が引き続き認められました。
・赤外熱映像装置による観測では、2026 年７月の現地調査と比較して、火口内の地表面温度の分布に変化はみられず、高温域が拡大した様子は認められませんでした。

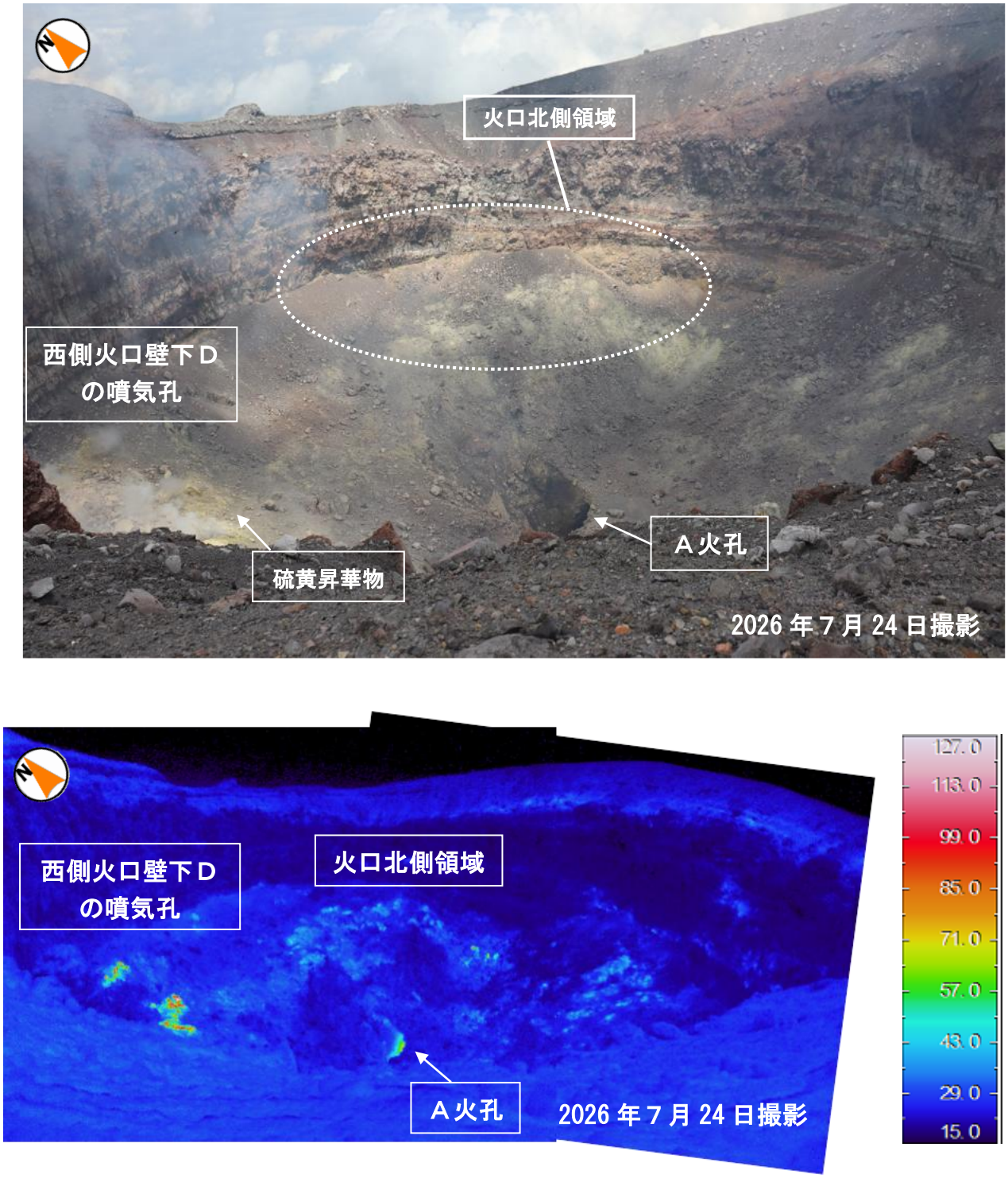


図２－２　浅間山　火口南西縁からみた山頂火口内の状況（2026 年７月 24 日）

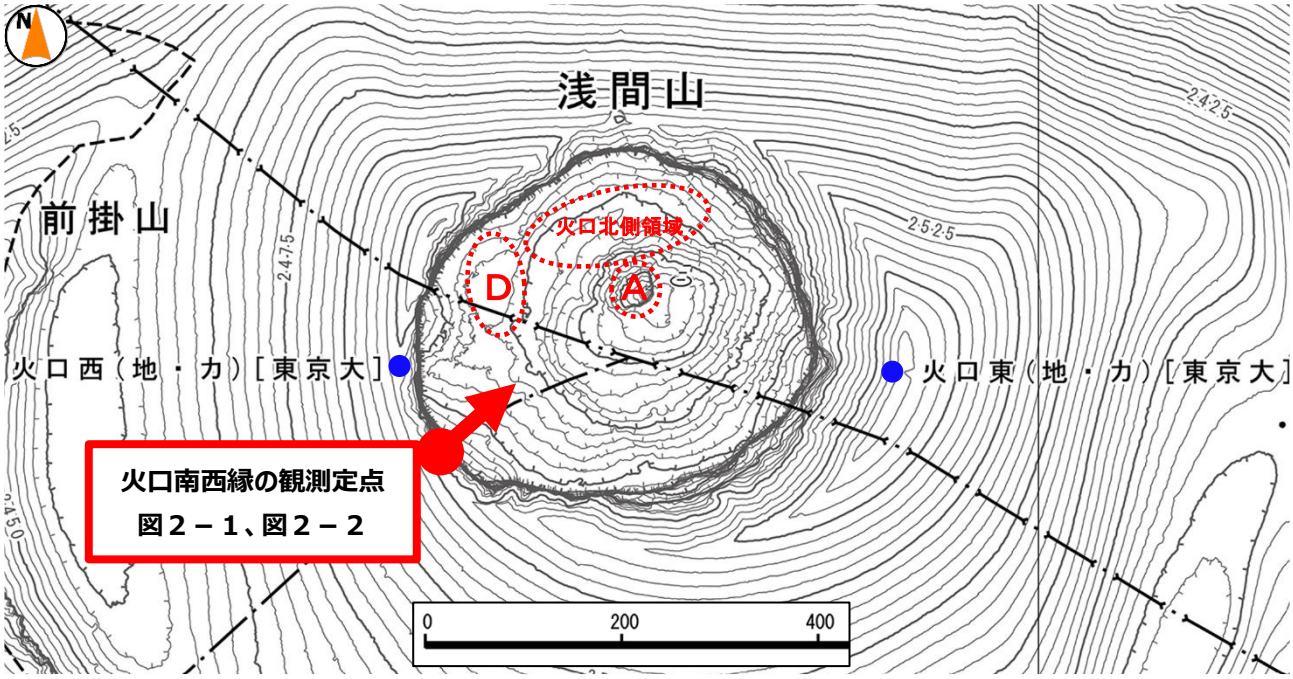


図２－３　浅間山　現地調査定点の撮影位置・方向

（国土地理院火山基本図（2022）浅間山Ⅶに加筆修正）

赤破線内は主な山頂火口内の噴気・高温領域分布を示す。

●は，東京大学地震研究所が火口縁に設置している火口カメラ（及び地震計等）の位置。

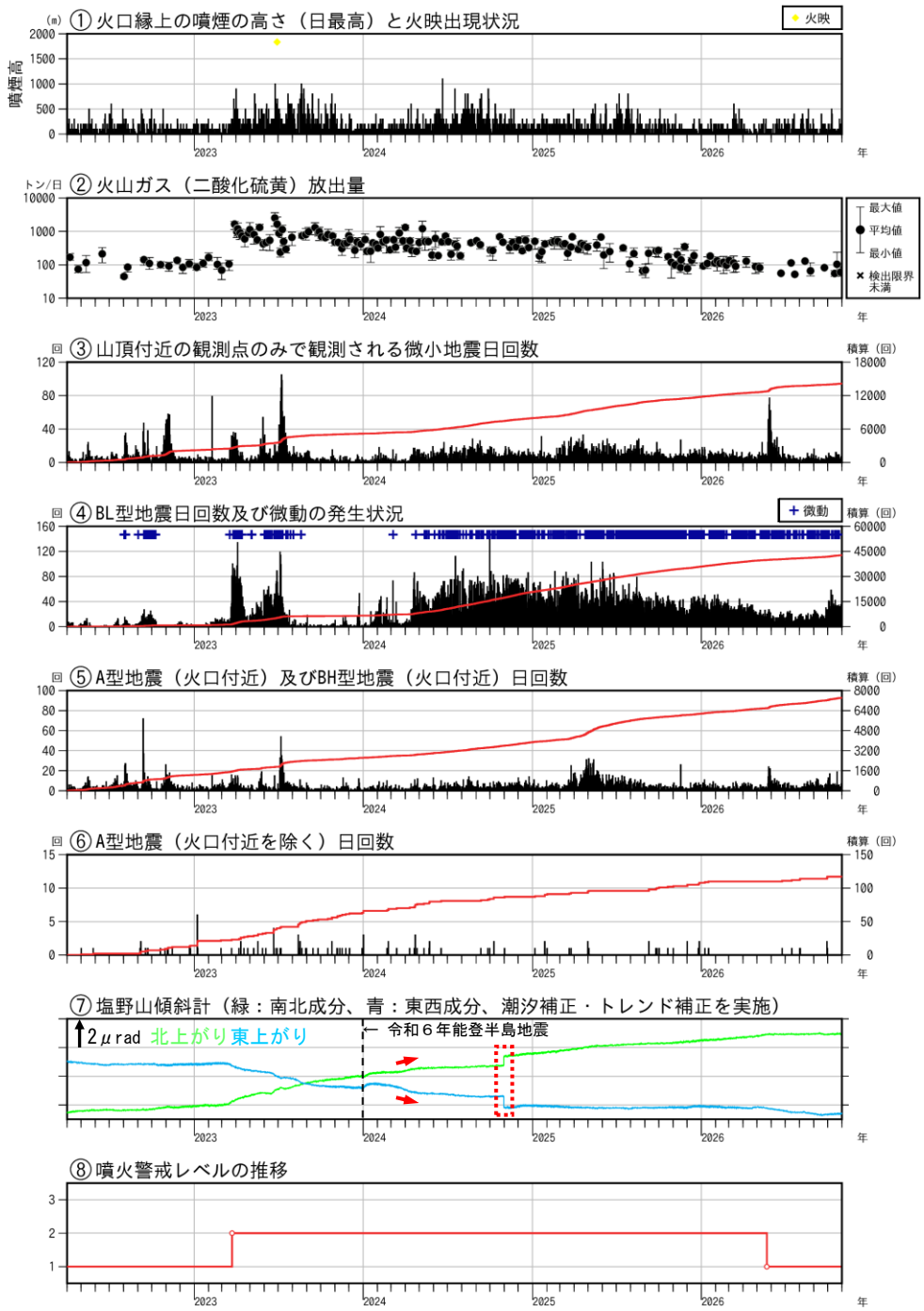


図３　浅間山　短期火山活動経過図（2022 年４月１日～2026 年 10 月 31 日）

・山頂火口からの噴煙は白色で、噴煙の高さは火口縁上500m以下で経過しました（①）。
・期間内に実施した現地調査では、火山ガス（二酸化硫黄）の放出量は１日あたり60～100トンでした。2025年12月頃からは少ない状態になっています（②）。
・今期間、火山性地震の日回数は、概ね 30 回から 60 回程度で推移しました。山体浅部を震源とする火山性地震は、９月下旬からやや増加しており、前１ヶ月平均の日地震回数は、40 回程度となっています（④⑤⑥）。
・振幅が小さく継続時間の短い火山性微動が時々発生しました（④）。
・2024年３月中旬から同年５月まで、山体の西側での膨張を示すと考えられる傾斜変動がみられました（⑦赤矢印）。同年５月以降、停滞しています。

③～⑥の赤線は積算回数を示します。⑦の赤破線内の変化はシステム更新に伴うステップです。

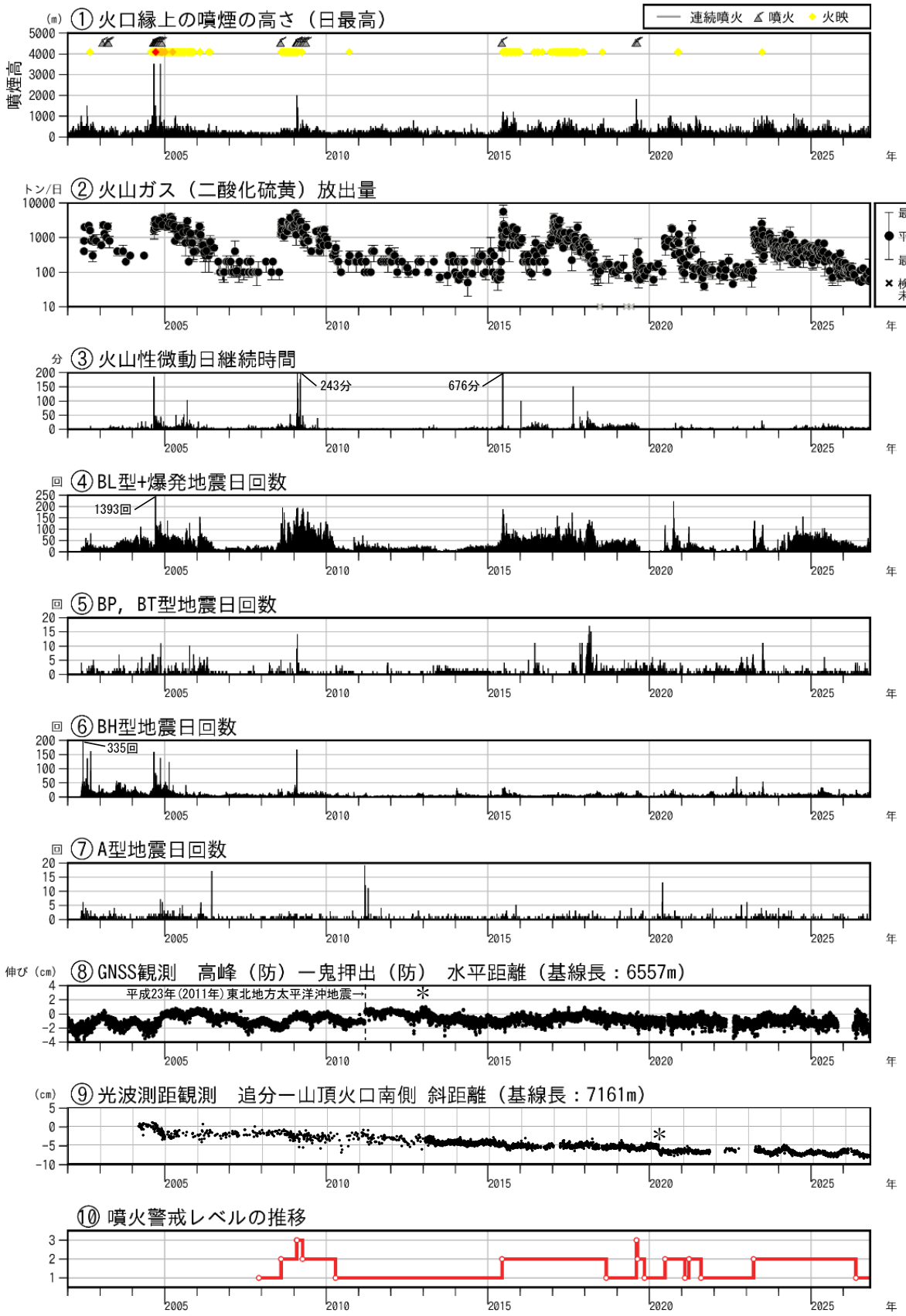


図４　浅間山　長期火山活動経過図（2002年１月１日～2026年10月31日）

（前ページ　図４の説明）

① 火映強度については、以下のとおりです。
- ◆０：肉眼では確認できず、監視カメラ（高感度カメラ）によってのみ確認できる程度
- ◆１：肉眼でようやく認められる程度
- ◆２：肉眼で明らかに認められる程度

② 国立研究開発法人産業技術総合研究所及び東京大学による観測結果が含まれています。

③～⑦計数基準は石尊観測点で南北成分最大振幅 0.1μｍ以上、S-P 時間３秒以内
火山性地震の種類は図５のとおりです。

⑧ 2012 年７月 31 日まで　　気象庁の高峰－鬼押観測点間の基線長（基線長 7417m）
2012 年８月１日以降　　高峰(防)－鬼押出(防)観測点間の基線長
（防）：国立研究開発法人防災科学技術研究所。2010 年 10 月及び 2016 年１月に解析方法を変更しています。

⑧⑨ ＊で示す変動の原因は不明ですが、火山活動によるものではないと考えられます。

⑨ 2016 年まで　基線長 7096.767m
2017 年以降　基線長 7161.675m

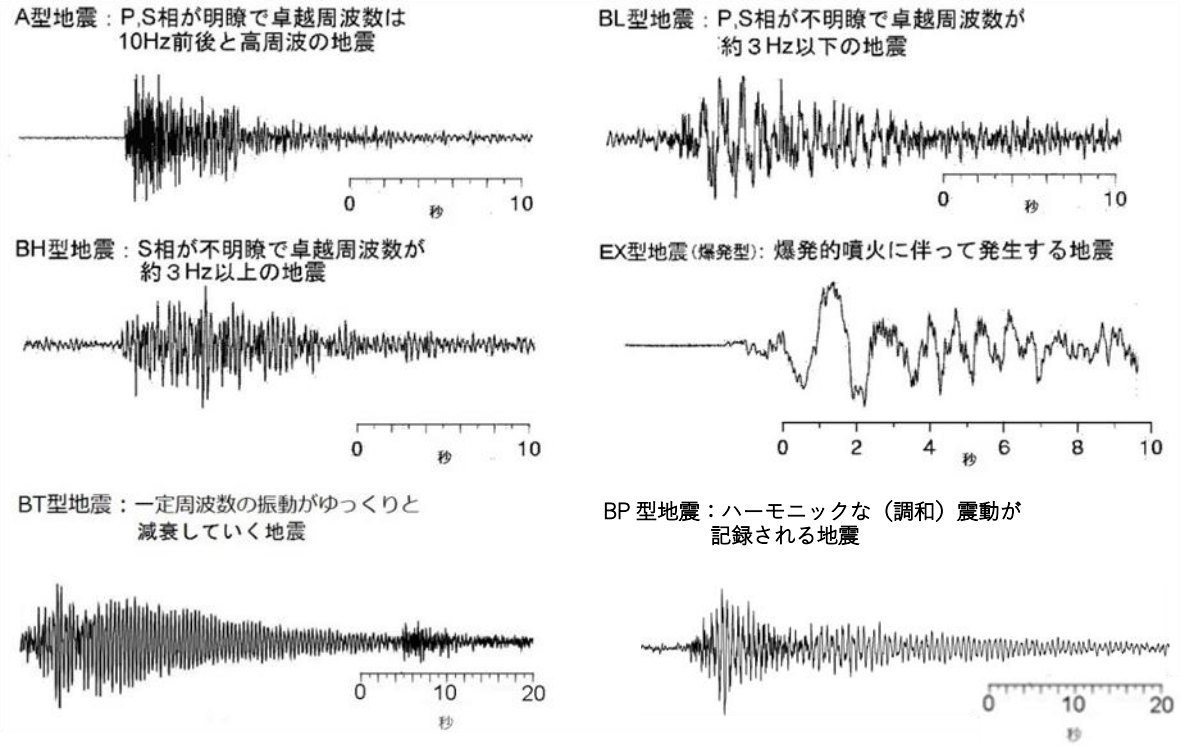


図５　浅間山　主な火山性地震の特徴と波形例

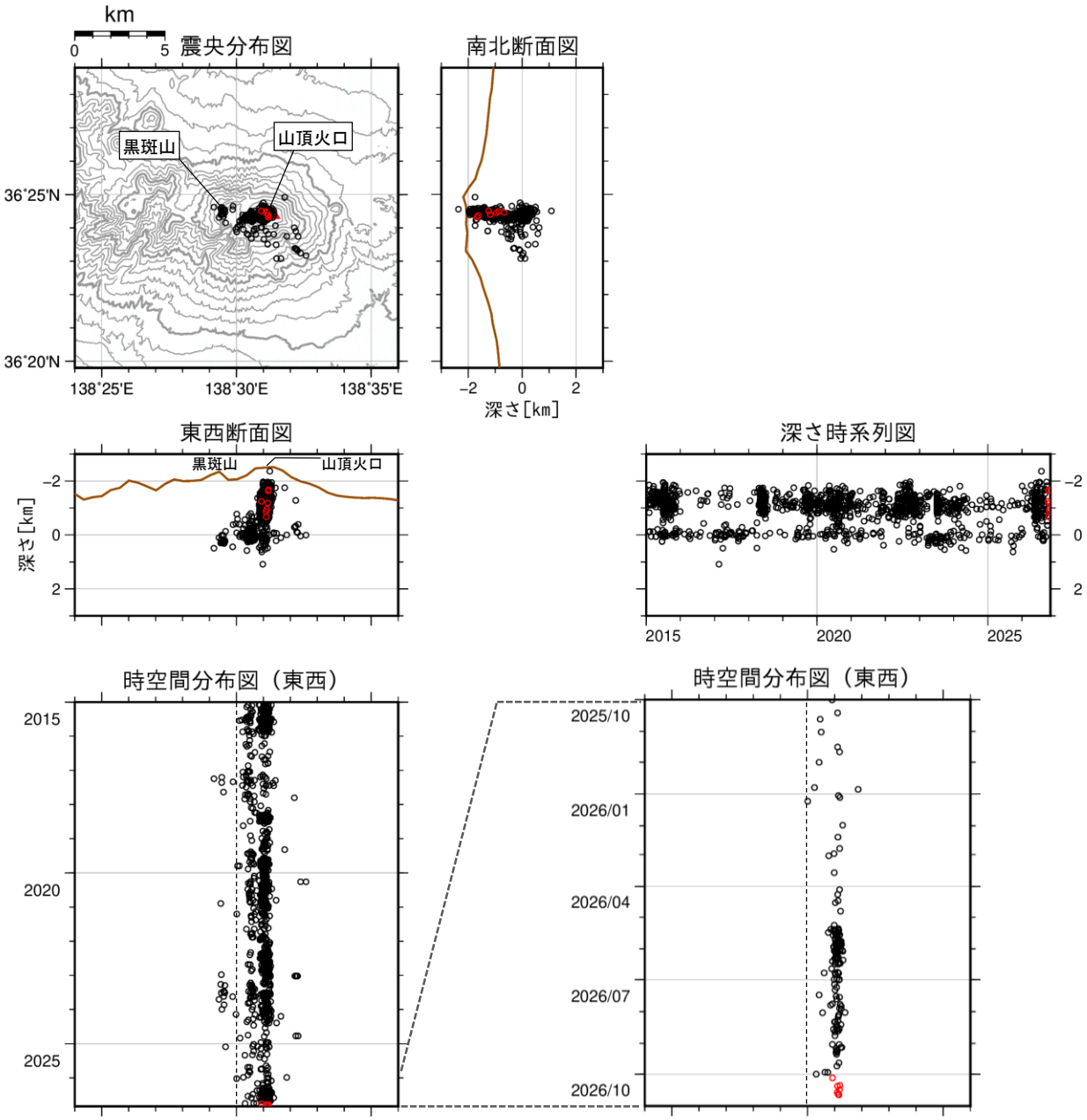


図６　浅間山　震源分布図（2015 年１月１日～2026 年 10 月 31 日）
○：2015 年１月１日～2026 年９月 30 日
○：2026 年 10 月１日～31 日

・今期間、震源が決まった火山性地震は、主に従来からみられている山頂直下の深さ－２～－１km（海抜１～２km）付近に分布しています。

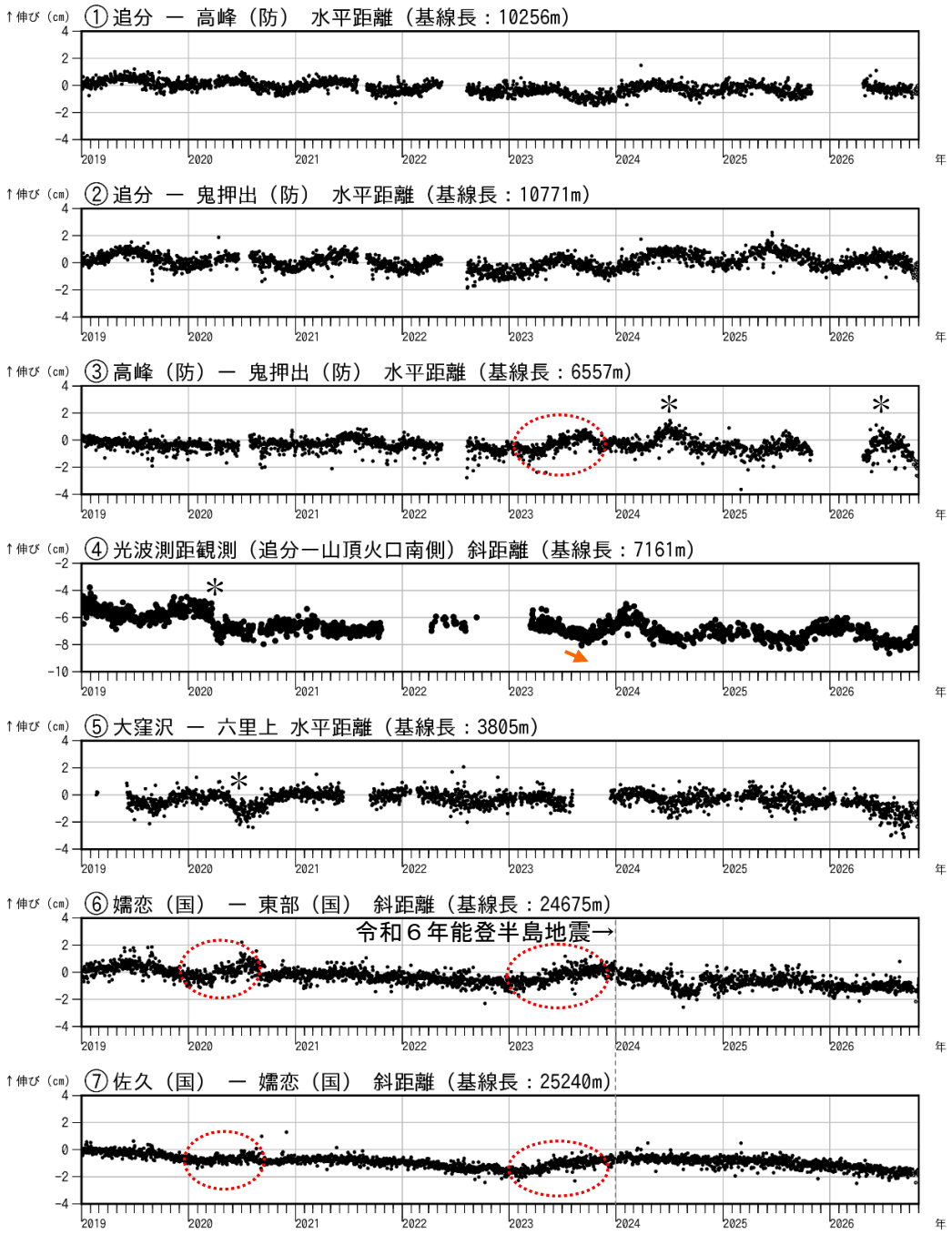


図７　浅間山　GNSS 連続観測及び光波測距観測結果(2019 年１月１日～2026 年 10 月 31 日)

・GNSS 連続観測及び光波測距観測では、現在、火山活動によると推定される伸びは認められていません。
・過去には、山体の西側を挟む基線などでわずかな伸びがみられました（赤破線）。
　これらは浅間山西麓の地下でのマグマの蓄積を示すと考えられています。
・光波測距観測では、過去には山頂と追分の間でわずかな縮みの傾向がみられました（④橙矢印）。
　これは、山頂部のごく浅いところの膨張によるものである可能性があります。

（防）：国立研究開発法人防災科学技術研究所
①～⑦は図８の①～⑦にそれぞれ対応しています。空白部分は欠測を示します。
①②　追分観測点は、2016 年 12 月に移設しており、その後、基線長に年周変化がみられています。
③④　＊の変動の原因は不明ですが、火山活動によるものではないと考えられます。
⑤　　＊の変動は大窪沢観測点の固有の変動であり、火山活動によるものではないと考えられます。

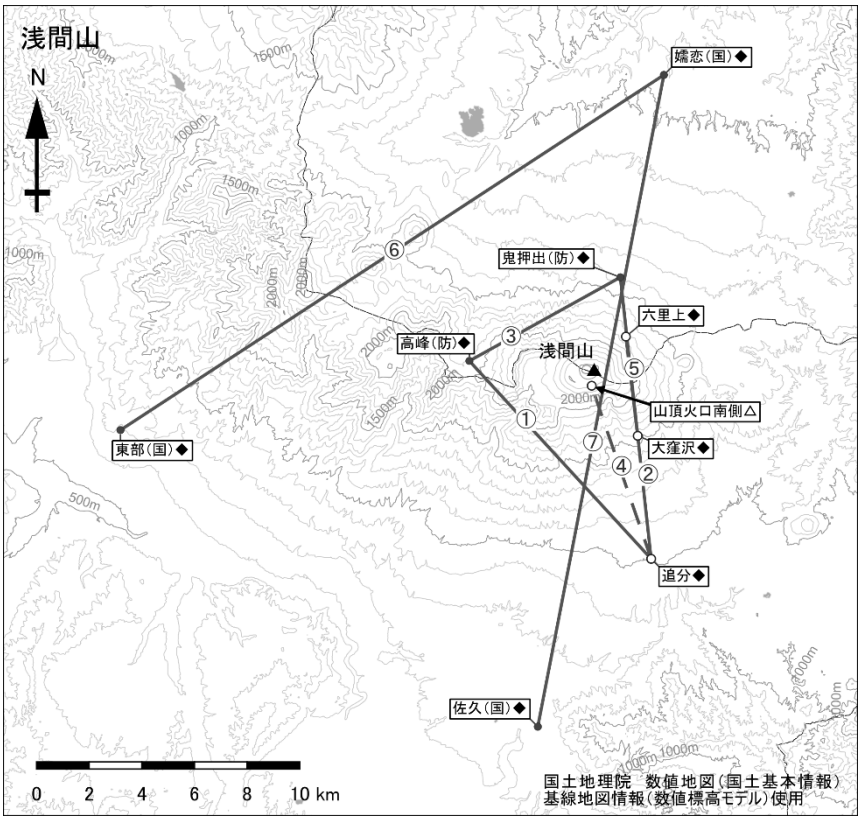
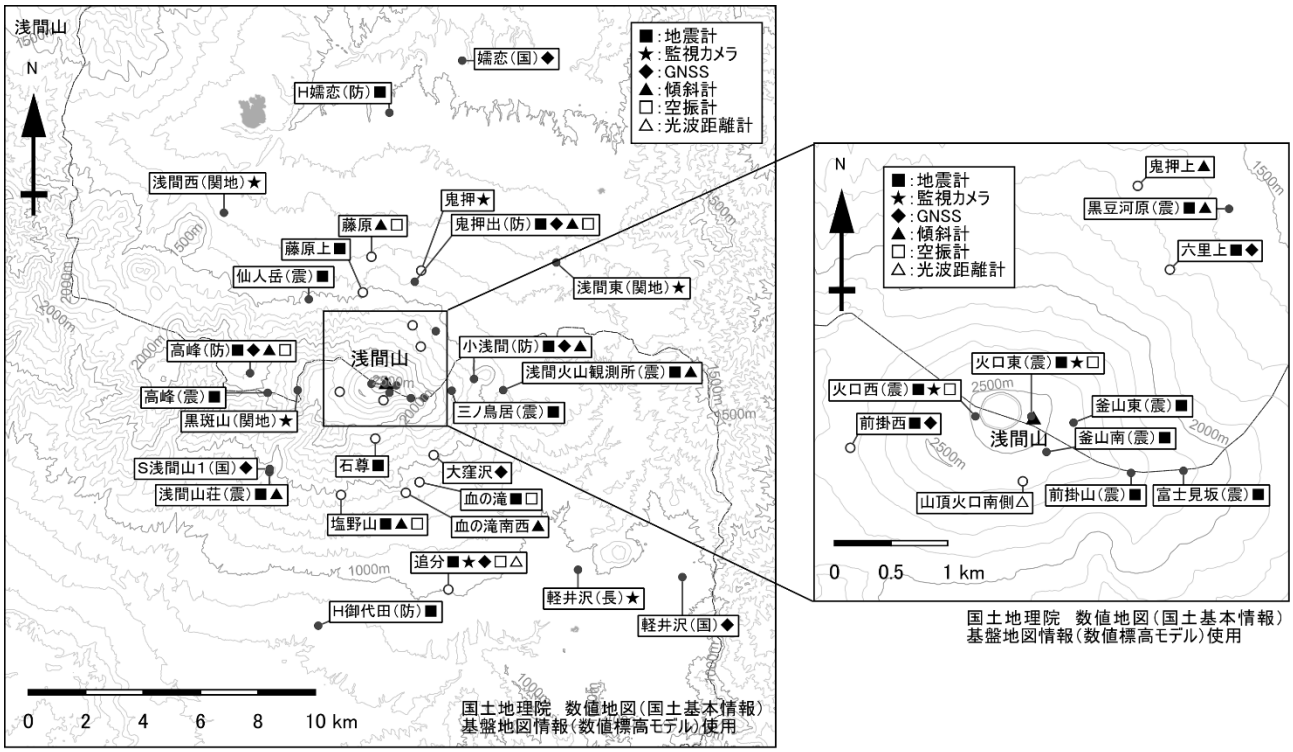


図８　浅間山　地殻変動連続観測点配置図

（防）：国立研究開発法人防災科学技術研究所、（国）：国土地理院
GNSS 基線③は図４⑧に対応しています。また、GNSS 基線①～③及び⑤～⑦は図７の①～③及び⑤～⑦にそれぞれ対応しています。光波測距測線④は図４の⑨、図７の④に対応しています。



小さな白丸（○）は気象庁、小さな黒丸（●）は気象庁以外の機関の観測点位置を示しています。
（国）：国土地理院、（防）：防災科学技術研究所、（震）：東京大学地震研究所、（関地）：関東地方整備局、（長）：長野県

図９　浅間山　観測点配置図